

## 肛門周囲腺腫と診断した雌犬の1例

安部あい

### 要約

10歳避妊雌のダックスフンドが肛門の右側の皮下腫瘍を主訴に来院した。血液検査、やX線検査、腹部エコー検査では異常が見られず、完全なマージンの確保はできなかったが、外科手術により腫瘍の摘出を行った。性別や年齢から肛門嚢腺癌が疑われたが、病理組織学的には肛門周囲腺腫と診断された

キーワード：高齢雌犬 肛門周囲腺腫 肛門嚢腺癌

犬でみられる肛門周囲の腫瘍として最も多い腺腫は肛門周囲腺腫であり、未去勢の高齢犬によくみられる。この腫瘍は低悪性度のものが多いが、肛門嚢腺癌は雌の高齢犬によく発生し、悪性度が高いものが多い [1]。今回、雌の高齢犬で肛門周囲に皮下腫瘍がみられ肛門嚢腺癌が疑われたが病理組織学的に、肛門周囲腺腫と診断された症例について報告する。

### 症例

症例は10歳、避妊雌のダックスフンドで、体重は6.1kg、肛門右側皮下に直径約2.5cmの球状を呈する腫瘍が認められ、軟性で周囲皮下組織とは軽度固着していた(図1)。腫瘍による痛みや発赤はなく、しぶりなどの臨床症状や体表リンパ節の腫大も認められなかった。



図1 肛門右側における皮下腫瘍。

### 治療及び経過

血液検査所見：ALTの軽度上昇が認められたが、Caの上昇は見られなかった。(表1)

表1 血液検査成績

項目	
RBC ( $10^4/\mu\ell$ )	833
WBC ( $10^2/\mu\ell$ )	5,900
HGB (g/dℓ)	18.8
PCV (%)	54.5
PLT ( $10^4/\mu\ell$ )	31.9
Glu (mg/dℓ)	75
BUN (mg/dℓ)	10
ALT (U/ℓ)	88
ALP (U/ℓ)	75
Alb (g/dℓ)	3.3
Ca (mg/dℓ)	9.2
P (mg/dℓ)	2.7
Na (mEq/ℓ)	147.2
K (mEq/ℓ)	3.84
Cl (mEq/ℓ)	10.8

X線検査：肺や腹腔内臓器に著変は認められなかった(図2)。

腹部超音波エコー検査：腹腔内臓器に著変は認められず、腹腔内リンパ節及び、腰下リンパ節の腫大は認められなかった(図5)。



図2 腹部X線写真。著変は認められない。



図3 腫瘍(矢印)への栄養血管は不明瞭である。



図4 外科手術による皮下腫瘍(矢印)の摘出。

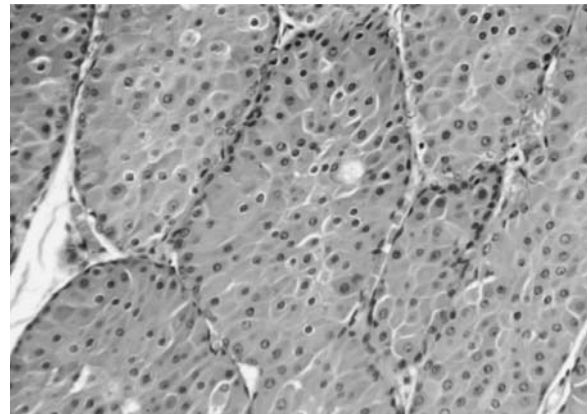


図5 肛門周囲皮下腫瘍，HE染色  
肝細胞に類似した異型性に乏しい上皮性腫瘍細胞の胞巣状増殖が認められる。

治療：完全なマージンの確保はできなかったが，外科手術により皮下腫瘍のみを摘出した。肛門周囲の軟部組織や肛門括約筋に癒着している様子は認められず，血管も豊富ではなく剥離容易であった(図4)。

病理検査結果：腫瘍のヘマトキシレン・エオジン(HE)染色標本の検索では，腫瘍細胞は線維性被膜を有する肝細胞に類似した異型性に乏しい上皮性腫瘍細胞による多小葉性増殖により構成されていた(図5)。部分的に被膜構造が不明瞭な部位も見られたが，腫瘍が完全に摘出されたことは判断可能であった。脈管浸潤も認められなかった。腫瘍の周囲には，過形成性に腫大した既存の肛門周囲腺腫が少数ながら配列しており，切除縁に至るまで分布していた。

### 考 察

本症例は高齢の雌犬であるため，術前に飼い主に対して肛門囊腺癌の可能性をインフォームした。肛門囊腺癌は外科手術を行った犬の生存期間が，無治療の犬に対して有意に長く，また腫瘍の大きさと高カルシウム血症が大きく関係しているため[1]，腫瘍の浸潤性が強く，マージンが不完全であったとしても，積極的に切除すべきであると考えられる。しかし，今回の症

例では術前のエコー検査で大きな栄養血管は認められず，実際の摘出時にも腫瘍は線維性被膜を有して境界明瞭であり，目立った血管も見られなかったため，被膜を破らずにほぼ腫瘍のみを摘出した。病理組織学的に悪性度の低い肛門周囲腺腫と診断されたため，術後の経過も良好であり，摘出の方法や飼い主への説明も問題なかったと思われる。ただ今回のように，雌犬で発生する肛門周囲腺腫の場合，副腎からのテストステロン分泌が起きている可能性が示唆されており，副腎疾患に対するミトタン療法により抑制されたという報告があり[2]，肛門周囲腺腫と肛門囊腺癌の鑑別には副腎機能の精査も考慮すべきだと考えられる。

### 引用文献

- [1] Gregory K, Antony O, Moore O: 犬の腫瘍，桃井康行監訳第1版，423，インターズー，東京。
- [2] Gregory K, Antony O, Moore S: 犬の腫瘍，桃井康行監訳第1版，419-421，インターズー，東京。